

2006 年 2 月 1 日、京都市の桂川の遊歩道で、無職の男性片桐康晴（当時 54 歳）被告が、認知症の母親（86 歳）の首を絞めて殺害、自身も死のうとしたが、未遂に終わった。

1995 年、父親が亡くなり、この頃から母親に認知症の症状があらわれ始める。事件から 11 年前である。2001 年の春頃、母子は京都市のアパートに引っ越した。親戚の好意で、家賃 6 万円のところを半額にしてもらって住み始めた。2005 年頃から母親の症状が悪化し、おにぎりの包み紙を食べたり、「狐がいる」と言って天井を叩いたりした。真夜中に外出しようとしたり、康晴が仕事に行っている間に徘徊して、警察に保護されたりしたこともあった。昼夜逆転の生活となっているため、母親は真夜中の 15 分おきに起き出し、そんな生活に康晴も疲れ始めていた。

夏になると介護保険を申請し、近所の施設でデイケアサービスを受け始めたが、昼夜逆転の生活は戻らなかった。康晴は献身に介護し、この頃から仕事も休職している。9 月には仕事をしながらの介護に限界を感じ、康晴は仕事を辞め、自宅でできる仕事を探したが見つからなかった。12 月には失業保険の給付もストップしている。役所にも 3 度相談をしたが、良いアドバイスはもらえなかった。「生活を持ち直せるしばらくの間だけでも、生活保護を受けられないか」と相談したこともあったが、「あなたはまだ働ける」と断られている。同じ頃、カードローンの借金も 25 万円の限界に達した。生活費に困った康晴は、自分の食事を 2 日に 1 回にし、母親の食事を優先した。康晴は父親が生前言っていた言葉を忘れなかった。「人に金を借りるくらいやったら、自分の生活を我慢すればいいのや」、「他人に迷惑をかけたらかかん」という言葉を。

2006 年 1 月 31 日、この日に払うべきアパートの家賃 3 万円はどこにもなかった。手持ちの現金はわずか 7000 円ほど。康晴は親族に相談もできず、自分たちに残された道は「死ぬこと」しかないと思った。

康晴は自宅アパートをきれいに掃除して、親族と大家宛ての遺書と印鑑をテーブルに置いた。その間、康晴は何度も母親に「明日で終わりなんやで」と話しかけている。最後の食事はコンビニで買ったパンとジュース。電気のブレーカーを落とすと、車いすの母とアパートを出た。

母親の「人の多い賑やかなところに行きたいな」という言葉で、三条の繁華街をまわった。康晴が子どもの頃、親子 3 人で食事をしたそば屋を通ったが、手持ちのお金がなく、食事はしなかった。夜にはアパートの近くに戻ってきた。

午後 10 時。「もうお金もない。もう生きられへんのやで。これで終わりやで」康晴は泣きながら目を覚ましたばかりの母に語りかけた。母親は泣きじゃくりながら謝る息子の頭をなで、「泣かなくていい」と言った。そして「そうか、もうアカンか、康晴。一緒やで。おまえと一緒にやで。こっち来い、こっち来い」と呼ぶ。2 人の額がぶつかり「康晴はわしの子や。わしの子やで。（お前が死ねないのなら）わしがやった」と母が言う。その言葉に康晴は「自分がやらなければ…」と思った。

そして意を決し、車いすのうしろにまわってタオルで母親の首を絞めた。絞め続けた後、苦しませたくないために首をナイフで切った。康晴は遺体に毛布をかけたあと、包丁とナイフで自分の首、腕、腹を切りつけ、近くのクスノキの枝にロープをかけ首を吊ろうとしたが失敗した。「土に帰りたい」と書かれたノートの入ったリュックサックを抱いて、冷たい雨の降る中で虚ろな表情でたたずんでいた。2 人が発見されたのは午前 8 時だった。

裁判所で説明がされる中、片桐被告は背筋を伸ばして上を向いていた。肩をふるわせ、めがねを外して右腕で涙をぬぐう場面もあった。本来被告人の有罪を主張する検察官は、片桐被告が献身的な介護の末に失職等を経て追い詰められていく過程を述べる。殺害時の 2 人のやりとりや「母の命を奪ったが、もう一度母の子に生まれたい」という供述も紹介。目を赤くした裁判官が言葉を詰まらせ、刑務官も涙をこらえるようにまばたきするなど、法廷は静まり返った。「痛ましく悲しい事件だった。今後あなた自身は生き抜いて、絶対に自分をあやめることのないよう、母のことを祈り、母のためにも幸せに生きてください」裁判官がこう語りかけると、片桐被告は「ありがとうございました」とお礼を述べた。